

No. 125
2018/10/19



OPEN オープンユニオン 岐阜大学職員組合ニュース UNION



岐阜大学職員組合発行

〒501-1193 岐阜市柳戸1番1
Tel. 内線 9552 Fax 058-230-1118
E-mail: kumiai@gifu-u.ac.jp
HomePage: 岐阜大学職員組合 (検索)

第35回定期大会を開催しました

第35回定期大会が9月19日（水）に開催されました。すべての支部から代議員が参加しました。

進行は宇佐美副委員長が務めました。まず、椎名委員長から「1年間の組合活動への協力に感謝します。今大会での活発な議論をお願いします」という挨拶がありました。また、全大教などから寄せられたメッセージが今村書記長から披露されました。

地域科学部支部及び教育学部支部の代議員が議長団に選出され、議事が始まりました。第1号議案として、第34期の活動報告が審議されました。人件費問題（教員人事ポイント削減）などが課題となった団体交渉について、成果はあったのか、今後も継続して取り組むのか、という質問が出され、委員長から、人勸に応じた賃上げを理由としたポイント削減がさらに進んでいる状況であり、継続して取り組む必要があるとの回答がありました。また、地域科学部廃止と新学部構想についても議論となり、情報を共有することの重要性や他の学部にも人事などで影響が出る可能性が指摘されました。

続いて、第2号議案として、第34期決算（三谷書記次長が報告）について協議しました。

第3号議案は、第35期活動方針案について審議しました。今期（第34期）の執行部が次期の活動方針案を提案することになった旨の説明がまずあり、委員長から提案がありました。職場状況の改善について情報交換をする必要があるという意見が出されました。また、委員長から名大職組から法人統合についての意見交換の申し込みがあったことが紹介されました。

第4号議案として、第35期予算案について協議しました。書記次長から報告があり、携帯電話や全大教加盟分担金について質問がありました。

すべての議案が、賛成多数で承認されました。

議長団の解任後、第35期の中央役員が紹介されました。新村新委員長（工学部支部）から「現在の大学はトップダウンで物事を進めようとする傾向があるが、ボトムアップも大事である。組合活動を活性化しよう」という挨拶があり、大会を締めくくりました。



（第34期中央執行委員会）

新中央執行委員長のあいさつ

第 35 期中央執行委員長 新村 昌治

第 35 期の中央執行委員長を務めることとなった新村です。岐阜大学に着任してから 33 年になります。着任後すぐに教職員組合に加入してから、支部役員、中央役員を何度か担当してきましたが、定年退職の年に委員長を引きうけることになるとは思っておりませんでした。しかし、お引き受けした以上は、老体を鞭打ちつつ、組合員の皆さんのご協力の下で、何とか務めてまいりたいと思っています。

33 年の間に岐阜大学で様々な変化を経験してきましたが、いま起ころうとしている変化はこれまでになく大きな変化であると思っています。しかも、その進め方について、とても大学のものとは思えない異質な感じ＝違和感をもっています。

「法人統合」は法人としての岐阜大学を消滅させる変化です。このような大きな変化が、法人としての将来像が十分検討されることなく、唯一の選択肢として提案されています。

「基本合意」に対する意見は募集中ですが、法人統合そのものは議論の対象ではないという姿勢です。各都道府県に最低 1 つの国立大学をおくという原則は維持するそうですが、そこでいう国立大学は大学にふさわしい自律性もつことが前提であり、経営権もそのための必要条件になるのではないかと思います。地方大学は必死にそういう努力を続けています。岐阜大学が先頭を切ってその努力を放棄しようとしているという風に見えるのですが、いかがでしょう。

新学部構想についても、地域科学部を転換することによって実現する構想であるにもかかわらず、地域科学部の意志がほとんど無視されているように感じます。教育は現在も進行中であり、どのような改革を行うにしても、その当事者である教員と学生の理解と了解が必要であると思われれます。

今、「教員人事基本計画（案）」が提案されています。昨年度に突然提案され、退職教員がでも補充できない状況が全学的に生じています。その案は、今年度に入って、2 度改定され、現在の案は信じられないような教員不補充案となっています。このままでは、カリキュラムを正常に実施できない状況すら生まれつつあります。2 度目の改定は人事院勧告を完全実施するためのものであるかのように説明されていますが、1000 ポイント近くの新たな削減のうち、人事院勧告で説明できるのは 260 ポイント程度であり、そのほとんどは説明できません。加えて、中途退職者のポイントは使用可能ポイントに含めないばかりか、そこで生じた人事申請は使用申請ポイントに含めるという「トリック」までおこなっています。一番大きな問題は、このような削減計画の中で、教育をどのように維持していくのかという最大の問題がほとんど議論されないまま、削減だけが強引に押し付けられていることです。年に何度も改定される「基本計画」にどんな意味があるのかも疑問です。

教育や研究は当事者の意欲と納得で進むものです。だから本来、「権威」とか「権力」は必要ないと考えています。大学が教育と研究を基本責務としている以上、（たとえ効率が悪くても）ボトムアップが基本になるべきであると思います。学生時代に、教養教育の論理学の授業で「虚偽論」を学びました。「権威とは、検証しないまま正しいと認めさせるための虚偽論」であり、「権力とは、納得していない人への強制力」である（表現は正確でないかもしれませんが）。正しさを検証し、納得を得ながら進める場合には、権威や権力は必要ないと思っています。

2004 年に岐阜大学が法人化されてから、職種によらず組合員は平等であることを明確にする趣旨で教職員組合は職員組合と名前をかえ、その歴史を継承しつつも、労働組合として自らを再定義することになりました。このことによって、組合は給与や労働時間などの労働条件の改善を第一義的な課題とするようになりました。一方、組合規約には、事業として

「（3）大学における教育・研究・医療の民主的発展に関すること、（4）大学運営の民主化に関すること」が掲げられています。通常の労働組合にはない、大学の組合ならではの課題（事業）です。よりよい岐阜大学をつくるための課題として、組合員の皆さんとともに、この課題にも大いに取り組んでいきたいと思っています。1 年間、よろしくお願いします。

委員長退任あいさつ

第34期中央執行委員長 椎名貴彦

第34期中央執行委員長を務めました応用生物科学部支部の椎名です。1年間の組合活動におきまして、様々な局面で、中央執行委員の皆様、組合員の皆様に助けられました。まず、感謝を申し上げたいと思います。

今期は、「人件費大幅削減」「新学部構想」「退職金削減」という大問題についての団体交渉の準備から始まりました。その後、「名大との法人統合」が明らかになりました。さらに、非常勤講師に関わる労働問題も発覚しました。これらの問題に対して、団体交渉や懇談会等を通して、大学側に要求を出し、また、意見交換しました。十分ではないものの、職員の利益となるような成果を勝ち取ることができました。組合の意義を改めて感じました。

私は中央執行委員長としての抱負として、「組合への加入促進」「組合の拡大」、そして「次回大会を実質増員で迎える」を掲げました。残念ながら実質増員は成せませんでしたので、今後は、一組合員として引き続き、拡大に取り組んでいきたいと考えています。

教研集会（岡山大：9/14-16）報告

第29回教職員研究集会に参加してきました。最初に宣伝しておきます。当該教研は2年に1回の開催になったようです。当該旅費に関しては単組1名+分科会発表者+事務職員・附属・男女共同参画等分科会参加者には支給されることがあります。要は岐阜大職組の負担なしです。全国の仲間と交流できますのでお勧めです。

私は自分に負荷をかけるべく2分科会にレポート提出したので、直前までPPT作成に手間どり大変でしたが、発表に対し示唆いただけることも多く良かったです。

今回のテーマは「大学・高等教育の未来～加速する政府主導の大学改革を超えて～」でした。『政府主導』ということで、内閣府・経産省が大学に文科を超えたところで新自由主義的な圧力をかけている実態が提起されていました。



まず、記念講演は寺脇研氏（元文科省審議官）でした。今、時の人「前川喜平元文部事務次官」との交流もあり、いかに時の政権や文部省内で官僚として文部行政で戦ってきたかがよくわかりました。著書等で理解するのとは違う面から理解が深まりました。た

だ、よくしゃべる方でした。きっと現在の社会情勢にいろいろ不満がたまっていたのでしょう。ただし抽象論に留まらず、具体的にどう展開するかが全大教の役割だと感じました。

A分科会は「高等教育政策」に参加して、「軍事研究と大学自治」というタイトルで、防衛装備庁の公募研究への岐阜大学状況を絡めて報告しました。質疑応答では徳島大学の方から助言を頂き、総括の場面では、「歴史の1断面の一つとして軍学研究を捉える視点」を提示いただき、さすが全国教研だと感じました。

C分科会は「1法人複数大学問題」と説明にあったので、公立大学の分科会に参加して、国立大学が法人化する以上に、さまざまな形態の運営方式が採用されていて、本当に混乱する

くらいなんでもありの世界の実態の報告を受けました。また、待たなしの改革なのに、その全容が決められていないという状況がすごかったです。国立大学の場合、どうしても概算要求に関わるので、段階を経て決める時間があり、その過程で内容が詰められるのですが、その点がないせいかもしれないと思いました。とにかく圧倒されました。

B分科会は職種別だったので、事務職員部会に出ました。そこでも簡単な報告をしました。夕刻には岡山の夜の街に繰り出しました。既知の方は、お互いに年を取ったのがよくわかると慰めあい、私の感覚が若い世代と大きくかい離している点が自覚できました。

また初日の夜に行われた交流会では、地区ごとの発言で、特に大風被害にあった北大からは「大学の機能停止にならない」ことの重要性発言があり、特に留学生にとっては、大学がコミュニティの中心であることを自覚する必要性を痛感しました。また最後には岡山大学職組のコーラス部（混声合唱）の歌で締めくくられ、ここに向けての練習されたことに大いに感謝しました。個人的には、大きな収穫がありました。というのも元鹿児島大学長の田中弘允先生とお会いできお話できた点です。法人化時には、法人化の反対表明をいち早くされて、当時の国大協に対峙された方で、運動の中で大きな力をもらった方です。事務職員の役割は大事だよと励まされました。また旧知の私大の知り合いにも、ほんとに久しぶりに再会できたものうれしいことの1つでした。



エクスカーション（ハンセン病施設見学）参加

岡山大学職組が、エクスカーションを企画いただき、長島愛生園（ハンセン病施設）の見学に参加しました。総勢38名の参加で、観光バスで1時間程度かけて施設に行き、夕刻5時過ぎに岡山駅に帰ってきました。恥ずかしながら予備知識も少なく、とっても「重いお話」でした。歴史館見学、外施設等案内、園長の話と、決して個人で行っては体験できない内容のものでした。

数年前に亡くなられた入所者の方のメッセージ「正しく知って、正しく行動する」を受け止めながらも、その「正しい知識」と、自分に染み付いた「感覚」での大いに悩むところです。人権教育で訪れる学校関係者も多いとのことでした。161人が愛生園におられても現在ハンセン病患者は1人もいない。すべての方がとくに全員完治していて、現在はその感染症の2次被害で社会から大きな差別を受けてきて、それを国がいつまでも隔離してきた経緯に、園長の問いかけがありました。「そうした方が電車の隣に座ってきてもあなたは平気でいられますか？」の問いには、正直「何気なく席を立つだろう」自分を思い浮かべてしまいました。特に重い2次症状の方の写真も見せて



いただき、軽症の方は大丈夫でも、重症の方に私は大丈夫か？と自問自答しました。でも歴史から学ばなければいけないと同時に、重いものをもって帰りました。行き帰りのバスの中、福島大学のかたと原発問題等についても話でき、また書記さんとして苦勞もお聞きできて有意義なエクスカーションでした。

（工学部：事務職員：山口利哉）